

---

**「入居契約完了しました。」**

魚日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「入居契約完了しました。」

### 【Nコード】

N0977W

### 【作者名】

魚日

### 【あらすじ】

洋館を舞台に展開するシリーズです。一話ずつで完結させていく予定です。LV・1から勇者、します。

## 1・初めまして

私がこれから語るのは、先の見えない道を敢えて進もうとする男の話になる。

すぐ横にきれいに舗装された道があるというのに、彼は何故かその道に進むことを嫌った。

これは、そんな男の話である。

— K・T —

ピーッ…、ピーッ…、ピーッ…、ピーッ…、ピーッ…、ピーッ…

古い暖炉のある部屋に不釣り合いな音が部屋いっぱいに鳴り響いた。

「あら、また落ちたのね」

「……助けに行つてはやらないのか？」

長い黒髪を一つに束ね、身軽な恰好をした女性がソファの背もたれに腰を乗せている。

「んー、だってあそこ突破できないんだつたら…住めないわ。この家」

振り返るとそこにいるのはプラチナブロンドを緩やかに後ろになでつけた軍服の男性が羽ペンを手に書類に向かっていている。

「…まあ、それは、そうだな…。」

頬杖をつきながら女性に向かって軍服の男は思案顔を向ける。

「…あら、あの子のこと気になる？」

「……まあ、そうだな…」



少年と少女が本に手をかざすと徐々に文字が浮かび上がってきた。  
「ビンゴ」

半人前の勇者は追われる。ぐるぐる、ぐるぐると

## 2・勇者入居

「…えーっと、あの、ここですか？」

一人暮らしを決意して二日。それから物件を探し始めて一日。街角にひっそりとたたずんでいた不動産で格安の物件を頼んだのが間違いだったのか…。

それとも、下見なしで契約したのがまちがだったのか…。

…両方だな、うん。

レンズ越しに見える風景は、よく言えばレトロな味のある洋館…まあ、ぶっちゃけ吸血鬼の住んでいそうな洋館だ。

「うん、そうだよ。…ちなみに僕もこの住人」

この優しい顔に騙されたんだよなあ…。

不動産屋がこの住人というのは本当なのだろう。慣れた手つきで門を開け、洋館の中に入っていく。

「ちょあっと、変わってるけどね。…いいとこだよ。ここ」

ご飯は美味しいし、住人の蔵書も豊富だからねー、…あ、本好き？と他愛もない話をされる間、俺の視線は上に向いていた。

…玄関を入ってすぐにエントランスホールがある。パーティーぐらいなら余裕で開ける広さだ。

「……でね、ここ階段ないんだよ」

階段がない、という言葉でやっと不動産屋の顔を見る。

「…え、でも外観はどう見ても三階建てだったんですけど…」

階段がない、梯子ならあるとか言い出すんじゃないよな？

「うん、その代わりエレベーターが三台あるの」

…階段つけるよ。

エレベーターが三台もあるということは、大家に金がないわけではないらしい。

「じゃあ、先に大家さんに挨拶しておく？」

「あ、はい。そうですねご挨拶しないと…」

じゃあ、こっちだね。…と、不動産屋が案内してくれたのはえれべ

「…なんスか、これ…」

「なにつて…、エレベーターだよ？」

他に何に見えるのー。という不動産屋のおおらかな口調は、俺の耳の右から左へと流れた。

「や、だって。穴：空いてますよね？！しかも、これ向こうまで三メートルくらいはありますよね？！」

俺が凝視する床には決定的に足りないものがあつた…。床板。

「そもそも床板がないって何?! えっと、これ欠陥工事? や、って  
ゆうか不動産屋がにこにこしながら向こう側に… え? 走り幅跳び?  
!!!!

「ほらあ、早く、はやく」

「あ、」

無理つす。

[illegible]

「……人間の順応って怖いな」

今や俺も、走り幅跳びの選手だ。

### 3・落下

入居契約した洋館には階段がなく、エレベーターがあった。

問題はエレベーター前の穴。

手慣れたように飛び越す不動産屋に信じられないというような目を向けた。

「大丈夫、だいじょうぶ。落ちても平気だから、思いっきり飛んじやってよ」

…無茶言うな。

落ちても平気。…いやあ、ウソだろ。…あれだ、平気っていう範疇は生きてることだ。

複雑骨折も、意識不明の重体もきつと平気に入るんだ！

「男は度胸だよー」

朗らかな笑顔を向ける不動産がどんどん疑わしくなってきた。

「…はあ……」

どうしようか。

穴と、エレベーターを見比べる。

「…よし」

できる限り助走をとる。

「……」

走っていき、跳躍の地点を計算する。

走る、よし、いけるぞ！

「…っ」

「あ、そこは…ダメ！」

「え？」

いざ、跳ぼうとするとところでまさかの向こう岸からの制止。

「……ええええっ！……！」

突然止まれるはずもなく、かといって向こうに無事跳べるはずもない。

「あ」

そして、俺は落ちて行った。

## 4・大家

落ちる、落ちる…

落ちていく

「ああああああっ！！！」

奈落へ落ちるということは、こういうことか。  
なぜか俺は冷静にそんなことを考えていた。

「ああああああ…．．．あ？」

ポヨン、と何かにはねて無事に地面に着地した。

「…え？」

…なんで？俺、落ちたよな？  
実際暗い場所にいる。

上を見上げるとさっきの穴が見えない。

「…どこまで落ちたんだよ」

辺りを見回そうにも暗すぎてよく見えない。

「だーいじょーぶっ?!」

上から声がかかったかと思うと、すぐそばに何者かが落ちてくる。

「わっ!」

「やっ」

手を挙げて、楽しそうな笑顔を向けられる。

\*\*\*\*\*

「やー、感心だね」

「は？何がですか？」

屈伸をしながら、こちらをにこにここと相変わらず見ている不動産屋に俺は眉間に皺を寄せる。

それはそつだ。

俺がこの穴に落ちた原因の半分くらいはこの人のせいにしてもいいくらいだと思う。

「え？大家さんに挨拶しようと思ったんでしょ？」

「大家さん？」

大家さん、はこの洋館の持ち主…で、部屋を貸してくれる人…。  
というイメージがある。ついでにパーマのおばちゃん。

\*\*\*\*\*

「ほらほら、しっかり走ないと死んじゃうよー」

なんでこの人はインテリな見た目に反して俺より走るの早いんだ！！  
全力疾走で走っても不動産屋に追いつかない。

「…っ！わかって、ますけどっ！」

俺たちを追いかけるのは、丸い岩。

ゴロゴロゴロゴロ追いかけてくる。

「はいとうちゃーく！」

相変わらず楽しそうに立っている不動産屋。

息が切れてない。俺は呼吸困難で三途の川が見えかけた。  
目の前にはいち枚の扉。

「・・・こ、こ・・・て、・・・な・・・」

ここって、なんの部屋ですか？

聞きたいことが言えないが、不動産屋はそのあたりのことがわかったらしい。

「ここはね、大家さんの部屋だよ」

「・・・おおや、さん、ここに、いるんすか？」

なんとか息が整ってきたので、今度は言葉になった。

「うん、起きてるといいねー」

起きてると・・・？

今夕方だぞ？

寝るのが早いとかか？

・・・違う気がする。

なんせ、エレベーターの前に穴作って、しかもこんな暗いところに部屋を持つ大家だ。

まともな人であるはずがない。・・・この不動産屋みたいに。

「・・・入るよー」

気を使ったのか、不動産屋の声が若干小さい。

「・・・起きてるよ。おはよう」

部屋に入ると、安楽椅子に座った男性が目に入った。

「噂の子、だね。なるほど。君が連れてきた理由がわかった」

「でしょー？」

二人で話をしているので、俺に会話に入る余地がほとんどなかった。

「・・・ああ、すまないね。ようこそ、歓迎するよ」

雪のように白い肌の男性は、濡れたような髪をかきあげて微笑む。

「今日から君は、勇者だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0977w/>

---

「入居契約完了しました。」

2011年9月10日19時06分発行